



## 体験版

# 目次

遠く、響く声・・・・・・・・・・・・・・・・三

水虎・・・・・・・・・・・・・・・・五

夏より来たりて・・・・・・・・八

体験版のあとがき・・・・・・・・九

## 遠く、響く声

朝。連日のようにワイドショーではこの街で起きている連続殺人事件が報道されている。以前起きた殺人事件を自殺と誤って判断、初動捜査が遅れて真犯人が逮捕されるまでに相当の時間を費やしてしまったという事があり、警察のこの事件への意気込みは凄まじいものがある。

だが、どうやらまだ私の存在には気付いていないらしく、監視の目も無いようだった。もつとも、ヘマをするほど私は愚かではない。

「よっ！ お前、寒くないか？ もう少しで雪も降りそうだし」

「いや、大丈夫だよ。昨日に比べれば寒くはない」

家の人間にそう答えると、私は空を見上げた。この地域ではそろそろ雪の降る頃だ。朝だというのにまるで夕方のように暗い。夜中から降りしきる雨が雪に変わるまでそう長くはないだろう。身を切るような寒さは嫌いではない。友人が受けた苦痛に比べれば。

何とも悲しげで救いの無いような光景を眺めながら思う。彼らは私のことなど気にとめていないだろうが、私は違う。出会うたびに蹴り、侮辱の言葉を投げつけ、更には嫌いな水を大量に掛けられたりもした私の友人。過度に掛かったストレスか、友人はそれから間もなく息を引き取った。彼らからすれば、それはほんの遊びだったかもしれないし、大した出来事でもなかったのかもしれないが、友人に行った仕打ちは私にとつて許し難いものだ。

人間という連中は嫌なことを、それも自分が悪いと自覚したものをすぐに隠そうとする都合のいい頭を持つているらしい。しかもそれで「忘れたという」という言葉を平気で使うのだ。そんな彼ら考えが浮かぶ度に私は、熟考の末に彼らをおのまま放つてはおけないという答えに達し、ついに決行したのだ。

「すみません、佐藤さんのお宅ですよ？ 警察の者ですが、一応、例の事件ついてご近所の方全てに聞き取り調査を実施していきまして、ご協力をお願いします」最近、この家にも警察の人間が来るようになった。事件が起きたのはすべての小さな新興住宅団地なのだから当たり前だ。まあ、私が犯人だということはまだ気付いていない様子だ。家の人間でさえも。

「本当に怖いですよ。色々考えて私たちも引越そうかと考えているんです」事件が起きてから、既に三軒の家がどこかへと引越していった。その中には私の顔なじみもいた。私たちの家も会社が事件のことを重くみたらしく、しばらくは子会社へ出向という対策をとったらしい。それほどまでに事件が残酷で連続的に起きているということを示している。

主犯格の男は事件の直後はおとなしくしていたようだった。しかし、一週間も

過ぎると恐怖心が薄れたのか、またフラフラとこの団地に姿を現し、今度は私の身にも危険が及ぼうとしていた。こうまでして彼ら、いやヤツらは我々を苦しめたいのか？ 既にその男によつて私の後ろ足に傷を負わされている。このままで友人の仇を討てなくなる。もう引き返せないのなら、やるしかない。そして家の引越しまで十日と迫ったその日。最後に残った主犯格の男は今夜実行しよう。

その夜は夕方から小雨が雪へと変わっていた。身を切るような寒さと恐怖感が私を留まらせようとする。しかし今を逃せばチャンスは二度と訪れない。奴の行動、ターンは熟知している。ああ、今日の前に奴がいる。近くにある自販機にタバコを買いに行くのだ。北風が私の手足をにわか凍り付かせ、動きを鈍くする。だが、この少しの時間だけあればいい。

「これで、最後だ」

私は降りしきる雪の中、姿勢を低くし狙った獲物に飛びかかるように、だが静かにその一点だけを見つめ、飛んだ。

すらりと伸びた銀色に輝く刃が寸分の狂いもなく男の首筋に突き立てられる。白い突風に悲鳴は掻き消され、雪は鮮血に染まっていく。男の目が私を見た。その表情は……。

新しくやってきたこの土地はとても温暖な気候だった。雪は降るが積もることはない。夏の厳しい暑さは少し身に堪えるが。この土地で私は以前の素行を隠して生活している。あの地で二度と殺人が起きることは多分ないだろう。

「これ、なんですかね？」

連続して起こった殺人事件が息を潜め、結局犯人も見つからないまま捜査は迷宮入りの様相を呈している。聞き込みで分かったことは殺害された四人がどこかの犬をいじめていたらしいということだけだった。雪解けを待ってもう一度現場を確かめるために行ってみると、近くにある広場から地中に埋まっていた包丁が発見された。

「包丁、か。刃先に血が付着しているみたいだな。おい！ 鑑識を呼べ！」

分析の結果、包丁に付着していた血は被害者のものと断定された。また、他の三人の血も僅かながら付着していることが判明。犯人のものと思われる指紋は検出されなかったが、おかしなことに大量の犬の唾液が付着していたという。

捜査員はいじめられていたという犬の話を出した。

「まさか、な」

どこか遠くで響いている、犬の遠吠えを確かに聞いたような気がした。

## 水虎

「ねえ時彦<sup>ときひこ</sup>、さつき湖から変な音がしなかった？」

「別に…。僕にはよく聞こえなかったけど。たぶん波の音じゃないかな」

君枝の言葉には僅かなお怯えの感情が入り交じっていた。僕は辺りを見回してみるけど、聞こえるのは打ち寄せる小さな波の音と、松林をかすかに揺らす風の音だけ。他に音が鳴りそうな物は一つもない。

ただ、打ち寄せては引いていく波の音に小さな違和感が存在していたことに僕は気付かなかった。

久しぶりの君枝とのデート。

大手の広告代理店に勤めている僕にとって毎日が忙しく、まともに休みを取ることもできなかった。自分の企画が会議で通り、担当者として満足のいく結果を出すことが出来た。そしてプロジェクトが一段落し、今日は休暇を取っている。

彼女の君枝はというと、僕が勤務している近くの喫茶店で店長を任されていて、繁盛期ということもあり、相手が忙しいはずなのだが電話で休みが取れたと話す彼女も喜んでくれた。そして僕たちは久しぶりに都会から離れたところにある観光名所の湖へとドライブに来ていた。

夏の夕日が沈みかけ、空全体にあかね色が広がり、大きく蚊帳を掛けたように揺らめいている。そろそろ夜の帳がおりるところだ。

「時彦、今日は楽しかったよ。実は仕事ばかりで正直疲れていたところなの。こうやってのんびりと過ごすのって本当、久しぶり」

「それはよかったよ、僕もデートに誘った甲斐があるってもんだ」

「ふふ、ありがと、時彦」

そう言って微笑み返す君枝の姿はバックの夕日と相まって、見とれてしまうほどに綺麗だ。

「ね、もう少し歩いて行かない？」

「…うん。そうだね」

そう答えてみるもの、僕にはどこか得体の知れない不安が胸を支配していくようで、本当はこの場所から早く離れたかった。

何か、何かが違うんだ。それが一体何なのか、僕にもそれは分からない。でも、もう彼女とはこれで逢えなくなってしまうのではないか？ そんな衝動に駆られていた。直感なんて信じたくはないけど……。

「時彦、どうかした？ 何だか顔色が悪いよ」

君枝の問いかけに僕は我に返る。

やっぱり僕の不安なんて当てにはならない。きつと、今までなかなか逢えなかったからそう考えてしまっているのかもしれない。

「いや、何でもないよ。じゃあ、もう少し歩いたら行こうか。今日はホテルも予約してあるしね」

「うん」

君枝の手がそと僕の腕にまわる。二人は誰もいない湖の浜辺を歩いて行く。もう夕日は沈んで周りからは虫の鳴き声が木霊し、静かに、そして小さく波が打ち寄せる。その音に混じって、『キーツ、キーツ』という、僕が今まで聞いたことがないような、それもこの世のものではない声がほんの少しだけ耳に残ったような気がした。まるで獲物を見つけたという歓喜の色が交錯するような叫び声だ。

「気のせい、気のせいだよな」

さあ、帰ろう。僕と君枝はこの湖を背に歩き始める。暗くなり、はつきりと見えなくなった砂浜にスニーカーが食い込み、シヤリ、と音を立てる。一步、また一步、僕たちは歩いて行く。

二人の歩く音と砂の鳴き声は少しずつずれ、不協和音を奏で始める。それは背中に奇妙な感覚を植え付ける。

シヤリ…

シヤリ… シヤリ…

僕は身体全体にへばりつくような恐怖感に囚われ、一瞬だけ足を止める。少し後ろを付いてきた君枝もつられて足を止めた。

シヤリ…

「えっ!？」

僕たち以外に砂浜に人がいたのだろうか？ それとも……。

一瞬、跡を付けてきた音が止まる。サア、と短い風が吹いた。気が付いた時、すぐ側にいたはずの君枝の姿はどこにもない。

何が起こった？ 君枝はどうして消えたんだ！ 頭の中はひどく混乱していた。ひとつ分かってるのは君枝を捜すこと。でもどこを探しても、何度湖まで見に行っても、君枝の姿はなかった。

一言もなく、悲鳴もなく、だが、彼女の立っていた場所から湖まで何かを引きずるような跡だけが生々しく残っている。それも次第に波にかき消されていく。沈んでしまった夕日から漆黒の夜空が現れ、ほんの少しの間だけ月が雲から顔を覗かせる。そして静かに波の打ち寄せる音が何故か大きく耳に聞こえてきた。その音に、彼女の、君枝の悲鳴が混じっていたような気がしたのは本当に思い過ぎ

しなのだろうか？

状況を把握できず、頭が混乱したまま再び湖を背に歩きはじめた。

『大丈夫、離ればなれにはならないよ』

狂気の声はすぐそこまで迫っていた。

## 夏より来たりて…

この日はとても暑かった。

むせ返るような湿った空気が風に運ばれていく。その中で私はじっと窓の外を眺めているのが好きだった。ステレオで鳴く蝉の音がうるさいという人もいるけれど、夏の風物詩なのだから、少しは大目にみてくれてもいいと思うのだけ。

夕方、時間が経つとともに、徐々に空が赤く染まり始め目を覆うほどの眩しさが飛び込んでくる。私はこの瞬間が好き。二番目にね。

「そろそろ、帰ってくる頃かなあ」

まだ片付いていない部屋の中を見渡してひとつため息を吐く。こんなコトだから私のようなじゃないとダメなのよね。

でも、いつもより遅いなあ。気晴らしに外へ出ようかしら。

「あつ、彼が帰ってきた!!!」

玄関が開く音が聞こえて、私は胸を躍らせる。なんていいタイミングなんだろうやっぱり私たちちって相性がいいのね。

「おかえり〜」

「ただいま。ふう、今日も疲れたよ」

「そう顔に書いてあるわ」

彼は考えていることがすぐ顔に出てしまう。まあ、それが可愛いところなんだけど。結局、彼は夕食を食べながらひとしきりお酒を飲んで寝てしまった。きつと余程疲れていたのね。でも私のこと、忘れてない？

なーんて思うけど、これからが私の時間。見とれてしまうほどに引き締まった腕。あの辺がとても美味しそう。

「お楽しみはこれから。さあ、食事の時間よ♪」

私は目を輝かせて彼を見る。まず、照準は……あの腕からね！ 私は愛しの彼に向かって飛び立った。



## あとがき

どうも！ サークル『飛ぶ黒猫』の渡瀬 由です。

体験版は楽しんでいただけただけでしょうか？ この体験版には本編に収録予定の二編と体験版のために収録した一編が入っています。

それぞれ趣向の違うエピソードですが、怖い・面白い、をベースに書いています。(若干、違うものもありますが)

さて、本編に収録予定の残り八編については、更に怖さが倍増しております。ショートショートなので簡単に読めてしまいますが、読めば読むほど、嘔めば嘔むほど怖さと味わいがジワツとくるものが多くなっております。お楽しみに！

まずは、お手にとって頂ければ幸いです。

再び、本編のあとがきでお会いできることを楽しみにしておりますよ？

渡瀬 由